Voyages to the Moon:
Marjorie Hope Nicolson

紀田順一郎―荒俣宏――責任編集

国書刊行会

世界幻想文学大系……責任編集＝紀田順一郎＋荒俣宏
第四十四巻

月世界への旅

昭和六一年六月二五日印刷　昭和六一年六月三〇日初版第一刷発行
著者――マージョリー・H・ニコルソン
訳者――高山宏
発行者――佐藤今朝夫
発行所――株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八　郵便番号一七〇　電話〇三―九一七―八二八七　振替東京五―六五二〇九
造本者――杉浦康平＋鈴木一誌　協力＝佐藤篤司
挿画――渡辺富士雄
印刷所――凸版印刷株式会社＋セイユウ写真印刷株式会社
製本所――凸版印刷株式会社
定価――三、九〇〇円
●落丁本・乱丁本はおとりかえします

高山宏たかやまひろし
一九四七年、岩手県生れ。
東京大学文学部卒業後、
同大学大学院修士課程修了。
現在、東京都立大学助教授。
専攻、英文学。
主要著訳書――
『アリス狩り』青土社、一九八一年。
『目の中の劇場―アリス狩りII』
青土社、一九八五年。
『ぱらふぇなりあ』青土社、近刊。
ハドスン『ルイス・キャロルの生涯』
東京図書、一九七六年。
フィッシャー『キャロル大魔法館』
河出書房新社、一九八一年。
ウィルフォード『道化と笏杖』
晶文社、一九八三年。
『夜の勝利―英国ゴシック詞華撰』
国書刊行会、一九八四年。
コーブ『〈魔〉のドラマトゥルギー』
ありな書房、近刊。

世界幻想文学大系——第四十四巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

月世界への旅

M・H・ニコルソン——高山宏＝訳

目次

7 ―― 月世界への旅

10 ―― 緒言

20 ―― 序章

34 ―― 第一章―新世界発見

80 ―― 第二章―超自然の旅

122 ―― 第三章―鳥の威を借る

182 ―― 第四章―傲りの翼

238——第五章——空飛ぶ車
308——第六章——主題の変奏
364——終章

399——コネクションズの魅惑——マージョリー・ニコルソンの観念史……高山宏

x——事項索引
vi——作品名索引
i——人名索引

月世界への旅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一九三六年より一九四一年に至る
スミス・カレッジの「科学と想像力」講座の
学生諸君に献ぐ。
彼女らの明敏かつ飄逸なる学期末レポートより、
その師は教えるより遥かに多くを
教えられた。

緒言

本書は、わたしが一九三五年に世に問うた、今は絶版となっている小著『月の中の世界』の続篇ということになる。前者においては、月を居住可能とする観念の科学的、哲学的背景に主として目を向けたので、フィクションのたぐいにはまずもって全然関心を持たなかった。ところが何かにふれて読むことになった月世界旅行譚、とりわけ飛行のために工夫された精妙な仕掛け三昧の方にすっかり魅了されてしまって、これはどうでも時間が許しさえすればもっと他の資料も集め、人間による大空の征服に先立つ二世紀間の文学の中に飛行という観念がどう展開したものか、ぜひにも辿ってみたいと思うようになった。

一九三七年、一学期の研修休暇（サバティカル）に恵まれて、わたしはカリフォルニア州サン・マリノにあるハンチントン・ライブラリーに行ったのだが、なるほどそれ以外の十七世紀文献の整備を誇っているとはいえ、ハンチントン・ライブラリーは特に科学関係に強いというわけでもないと知っていたこともあって、わたしとしては別段その構想を念頭に出かけて行ったのではなかった。気候不順のニュー・イングランドからカリフォルニアの温暖な気候に誘い出されるまま、十七世紀文学に対する他の多くの関心を満たしてくれる豊富な資料がサン・マリノで見つかることを知っていたから、わたしは勇躍出かけて行ったのである。

フランシス・ベイコンならそう呼んだかも知れないこの「豊沃なる宝庫」についてはとても語り尽くせない。幸運にもそこで仕事のできた他の学者たちと同様、わたしもいつも予想外の宝物に出くわすことができた。

マッグス兄弟のカタログ番号で第三八七番のコレクションは、初期の飛行文献の挿絵や文章に魅されるまま、わたしはしばしばこれを耽読した。わたしは、ハンチントン氏が、今では「マッグスの飛行文献（アエロノーティカ）」として知られている完全なコレクションを購入していたことを知った。

わたしが公式に取り組んでいた仕事は全然別のことだったため、飛行機械のことに没入するわけにはいかなかったけれども、わたし個人の楽しみということでマッグスのコレクション中のすべての本とパンフレットとを読破し、わたし自身、初期の月世界旅行者たちと彼らの奇妙な飛行機械の絵を収集し始めたのである。ハンチントン・ライブラリーでの研究は、わたしがそこの学部長をしていたスミス・カレッジのウィリアム・アラン・ニールソン総長の病気によって中断され、わたしは五月初旬東部へ向って帰って行ったが、その一年は余りに多忙でとても他の資料を集めるどころではなかった。ところが一九三七年の夏、ひたすら彼の学部構成員の勉強のためばかりを思ってくれたニールソン総長が、中断されていたサバティカルを続けるようにと勧めてくれたため、わたしはその夏の一部を割いてブリティッシュ・ミュージアムに行き、幾つかの空白を埋める一方、如何に多くの仕事が残っているかを以前にもましてはっきりと理解するようになっていった。

ニールソン総長の退任が差し迫っていたことや、わたし自身スミス・カレッジからコロンビア大学に移ったこともあって、学問的業績づくりや、もっと直接的な関心のある記事や一、二の本を書く仕事が先になってしまい、『月世界への旅』は十年の間、本職ではなく飽くまで余技にとどまり、余暇のための単なる息抜き以上のものにはなり得なかった。これらの年月の間、わたしは仕事で近隣の研究図書館のあれこれに赴く時にはいつでもそこで一時間、一日、いや時には一週間をかけて、「飛行人間」や「空飛ぶ車」を追い求めた

ものである。ジョン・クレラー、サージョン・ジェネラルズ、それにボルチモアのウェルチ・ライブラリー、ピーボディ・ライブラリーなど。ニューヨークの公立そして国会の両図書館もしばしば利用したが、二つとも飛行関係の文献が豊富だった。ゆっくりとわたしは資料をふやし、絵をもっと沢山収集していき、いろいろなカレッジや総合大学で行った講義や公開講演でそれらを使った。レクチャー・センターでも話をしたが、理由があってとりわけ、ブレッド・ローフ・スクール・オヴ・イングリッシュとクーパー・ユニオンは忘れることができない。また軍のキャンプでも話をし、現代の飛行士や空挺部隊の人たちにそもそも彼らがどうやって空を飛ぶようになったかの経緯を話してきかせようと努めた。兵隊たちは面白がってくれたが、飛行術の現在とこうして少しでも触れたあとでは、飛行術の歴史へと戻るのがしばしば困難であった。

これらの資料を纏める絶好の機会が、昨年トロント大学がわたしを招聘して、ある偉大な教師を讃えるため年ごとに行われている連続講義アレグザンダー・レクチャーズで講義するよう誘ってくれた時にやって来た。講演は四度に亘るということであった。するとすぐに、十七世紀ジョン・ウィルキンズが月世界旅行には四つの方法があると述べていたことをわたしは思い出した。精霊や天使の助けで行く方法、鳥を使う方法、人工翼を使う方法、そして空飛ぶ車による方法である。ジョン・ウィルキンズのこの提言を基本的骨格として準備を重ね、わたしは一九四六年一月、トロントで講義を行ったが、大変楽しい思い出である。

これらの講義が含んでいる、時代的な、或いは話題的な幾つかの限界については、わたしはそもそもの最初からは、これをその旨言い続けてきたつもりでいる。フランス、ドイツ、イタリア、スカンジナヴィア諸国で書かれた旅行譚を取り上げ、引用こそしたのだが、これでヨーロッパの宇宙旅行譚全部の研究であるというつもりは当時も毛頭なかったし、今だってない。わたしが読んだ英国以外の外国の旅行譚は仔細に立ち入

ることをしなかったし、それが存在することを知りながら第一読みさえしなかったものさえある。ヨーロッパ大陸側の旅行譚について言うなら、決してそれ自身のためにではなく、**それらが英国で愛読されたという理由から引き合いに出されている**。それらの中にはその国でと同じ位の人気を、実際英国で得たものもあったのである。英国の本にその言及があるのを見つけられなかった本で、わたしが敢えて議論したのは僅か一つか二つの旅行譚に過ぎない。省略したことが余りに多いことを誰よりもまず書き手たるこのわたしが知る本書が、まがりなりにも「網羅的」たることを言えそうなのは、**十七世紀、十八世紀に英国人読者が知っていた宇宙旅行譚について**、ということになる。

いまひとつの限界は時間についてのものである。これらの主題はことごとくが先史時代にまで遡り、そもそもいつ始まったのか誰にも言えないのだから〈起点〉の方は決めることはできなかったが、わたしは〈終点〉の方はわたしなりに決めていたのである。**最初の気球飛行の成功をもって、つまり一七八三年から八四年にかけての年号で終わるつもりであった**。あとの方で説明しようとしたことだが、飛行機械の上昇は、なるほど一方では別種の文学を大いに刺激しつつも、わたしがかかわってきたようなタイプ、というか飛行の現実性ということには別にこだわらない作者たちに書き継がれてきた**想像旅行に、実は終止符を打ったのである**。トロントで行った講演では、その下限設定を守ったが、唯一の例外があった。わたしは自分自身の楽しみのために、**『不思議の国のアリス』**という、私見では英国の宇宙旅行譚中の最大のもので講義をしめくくってみたのだった。そういうわけだが、何しろ古い主題で講義してみると必ず、もっと新しい時代の作家たちの惑星間旅行譚に関する質問を夥しく受けることもあり、ここでは短かいエピローグをつけ加え、エドガー・アラン・ポーやジュール・ヴェルヌ、H・G・ウェルズの幻想譚のひとつ、C・S・ルイスというわれらの

同時代の一、二の小説などの取材源について、若干述べてみてある。弁解と謝辞を述べておかねばならない。文学史家さえ知らないような資料を公然と大量に使いながら、本書には十ほどの脚注しかなく、しかも書誌的な注は一つか二つということに専門家の方々は呆然とされるであろう。わたしとしては大神ユピテルの前に首うなだれ、意のままに雷でお撃ち下さい、と言うほかはない。わたしにはわたしで思うところがあり、むろんそういう方々が時々には目新しいものを見つけて下さるならなお幸いであるのは言うまでもないわけだが、**どちらかというと専門家向けではなく**、カレッジやレクチャー・ホールでお会いしたような聴衆の方々に向けてこれを書いたのである。わたし自身も、テクストと同じページの中に印刷されている脚注のあわいをさ迷い歩くのは全然嫌いではない。しかし、仮にこの種の本には必要といわれても、何しろわれらの先達たちはその著作に長々と冗長な題名をつけ、しかもそのほとんどがラテン語の作ときては、一般読者の方々にはただひたすら煩わしいばかりであろう。専門家たちがいかなる反対を唱えようと、わたしとしてはカリフォルニアやヨーロッパに気楽に飛行機で飛び立っていくごくごく一般の読者が、彼らの祖たちの奇譚に何がしかの楽しみを見つけてくれればそれで足るのである。祖たちは、今頃までには彼らの裔たちは早、ちょうど彼らが近隣地方へ馬で旅するのに靴を買ったのと同じ感じで、普通の人が月へ行くのに翼を二枚買うようになっている筈と信じていたわけだから、われわれのことを眺めて「遅れているなあ」と長嘆息しかねない。

わたしにも学者としての良心というものはあるし、かなり詳しい文献書誌をつけ、わたしが当ったすべての資料と、わたしがしたすべてとまでは言わないが、ほとんどすべての引用について、何がしかの情報を盛り込むよう配慮した。専門家の方々は、わたしが脚注をつけてさえあれば、どこにこれこれの参照記事が載っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.